

## 2018年サッカーワールドカップを題材とした体育理論の実践

Practice of Physical Education Theory using 2018 World Cup football

村瀬 浩二

MURASE Koji

(和歌山大学教育学部)

橋本 大地

HASHIMOTO Daichi

(和歌山大学教育学部附属中学校)

流川 鎌語

NAGAREKAWA Kengo

(和歌山大学教育学部附属中学校)

堂村 孝道

DOMURA Takamichi

(和歌山大学教育学部附属中学校)

受理日 平成 31 年 1 月 21 日

**抄録:**中学生 1 年生を対象とした体育理論「多様なスポーツへの関わり方」領域においてサッカーワールドカップポーランド戦を教材とした授業を実践し、授業の最後に行った振り返り記述から生徒の学びを考察した。振り返り記述を検証した結果、賛成／反対どちらかの意見を記述した生徒、賛成／反対双方の意見を記述した生徒、自分の立場と逆の意見に理解を示す記述した生徒、議論を俯瞰的に捉えた記述した生徒の 4 種類が認められた。このうち、議論を俯瞰的に捉えた記述をした生徒は他の知識や経験と結びつけた「深い学び」をしていたと捉えることができた。このような俯瞰的な捉え方が、汎用的能力やスポーツの見方・考え方を育むと推察できる。

**キーワード:** 体育理論、サッカーワールドカップ、汎用的能力、スポーツの見方・考え方

## 1. はじめに

中学校保健体育科における体育領域には、「体育理論」という領域が存在する。中学校学習指導要領<sup>1)</sup>によれば、体育理論は 1～3 年の各学年において必修とされ、1 年生では運動やスポーツの多様性、2 年生では運動やスポーツの意義や効果、3 年生では文化としてのスポーツの意義を取り扱うこととされている。この体育理論の目的は、運動の行い方、方法を知識として得ることだけでなく、「する・見る・支える」などスポーツへの多様な関わり方を考えることで、スポーツに対する「見方・考え方」を育むことである。この見方・考え方を育むことで、「する」スポーツ以外の捉え方の学習を促進できる。また、文化としてスポーツを捉え、スポーツ実践が「できること」や「勝敗」だけでなく、人との交流、社会の繋がりに寄与することを学ぶことで、教科の目標でもある生涯スポーツ実践への資質・能力を育成すると考えることができる。しかし、中学校現場において体育理論を実践されてい

る割合は低い。村瀬ほか<sup>2)</sup>(2017)は体育理論の実施状況について 3 割程度と報告しており、その原因として①内容の取り扱いづらさ、②アクティブラーニングへの理解度の低さ、③教師の生涯スポーツ実践の資質育成の理解度の低さを挙げている。特に①の内容の取り扱いづらさについては、教材が生徒達の興味を持ちづらく、実技としての体育にその魅力が及ばないことから、生徒の興味を喚起しづらいことも指摘している。

では、スポーツにおいて社会的に議論を起こした出来事はどうか。2018 年 6 月にサッカーワールドカップ（以下 W 杯）が開催された。日本代表はグループリーグを 1 勝 1 敗 1 分けで突破し、決勝トーナメント（以下決勝 T）まで進んだ。決勝 T では初戦にベルギーと対戦し敗戦したものの、その戦いぶりから大きな話題となった。この一連の日本戦は様々な話題を国内外に提供したが、なかでも 2018 年 6 月 28 日グループリーグ第 3 戦のポーランド戦では賛否双方の議論が起きた。この試合は後半残り 10 分において、0-1 で負けているにも関わらず、日本チームによ

るパス回しが行われた。この試合は、そのまま試合終了までパス回しを続け、1点差の敗退とすることで、他会場の結果次第で決勝Tに勝ち上がる可能性が高かったためである。この行為には国内外から賛否双方の評価を受けた。例えば、「(日本は)セネガルが得点を入れれば敗退するかもしれず、自分たちで得点すれば16強入りが確実になるのに、西ドイツ対オーストリア戦より奇妙だった」(イギリスBBC放送)、「アキラ・ニシノは、自分たちが勝者だと胸を張っていい。日本は3度目の決勝T進出を果たし、ポーランドは1勝もできずにワールドカップを終えるという失態を免れた」(スペイン Marca 紙)といった賛否両論のコメントが世界中のメディアにおいて流された。このような議論は、日本国内のマスコミにおいても多く取り扱われており、中学生にとっても自国代表チームに関わることであり、多くの生徒が何らかの関心を持っていることは予想できる。

このような興味・関心の高い話題を、体育理論において取り扱うことにどのような意義があるであろうか。まず、W杯の最中や直後にこの話題を取り扱うことが可能であろう。また、メディア等で多く取り扱われていることから、生徒の興味を喚起し安い。さらに、様々な意見を取り入れながら、自分なりの態度を決定する行為はスポーツに対する見方・考え方を育むことができる。このような「見る」スポーツに対する見方・考え方は、生涯スポーツ実践への資質・能力へとつながるであろう。さらに、このような学習は人間関係形成・社会形成能力や課題対応能力、自己理解・自己管理能力といった汎用的能力<sup>3)</sup>の育成も期待できる。そこで本研究は、中学校1年生を対象に2018年W杯日本対ポーランド戦を教材とした体育理論を実践し、その実践内容と学習者の思考変容を検討することで、学習者の得た学びを考察することを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1. 実施対象・実施時期

和歌山大学附属中学校1年生4クラス137名を対象に各1時間実施した。実施時期は2018年の7月初旬であり、W杯日本対ポーランド戦の直後であった。

なお、実践した中学校は、ジグソー法などブレインストーミングによる協同学習を実施されており、生徒はグループ内での議論を頻繁に行っている。

### 2.2. 実施内容

日本対ポーランド戦に関する資料を配付し、それらを各自で読むことが授業の最初に行われた。資料の概要は表1に示す。

この資料を読む時間を取った後、内容について3～

表1 配布された資料の概要

#### 試合に関する概要

1. 「フェアプレーポイントの差」で決勝T進出
  - ・ 今回のW杯から導入された新ルール
  - ・ イエローカードやレッドカードの数が少ないほうの勝ち
  - ・ 日本は勝ち点や総得点などそのほかの条件が並んだため、フェアプレーポイントによりセネガルに勝利
2. 「時間稼ぎ」ともいえる戦術
  - ・ 引き分け以上で決勝T進出できた
  - ・ 後半にポーランドが1点先制
  - ・ 同時刻に行われていたコロンビア対セネガルでも、コロンビアが先制
  - ・ その状況を知った西野監督は、10分間攻めずにパス回しを指示した

#### 3. 各方面からの評価

##### <賛同派> (一部抜粋)

- ◆元スコットランド代表ネビン氏=英BBC放送「私はそんなフットボールは決して見たくないが、もし彼らが攻撃的に出て敗退していたら、ナイーブで愚か者だと言われただろう」
- ◆英サン紙「インターネット上には『警告の数も試合の一部』『ルールにのっとった行為』と評価する声も出ている」

##### <否定派> (一部抜粋)

- ◆英デーリー・メール紙「試合終盤の10分間は本当に恥ずかしい内容だった」
- ◆スペイン紙スポルト「最悪な試合。ニシノはおかしな先発で、日本をほぼほぼ1次リーグ敗退にまで追い込んだ」
- ◆イタリア・メディアセットTV「最後の10分間、日本が全く攻撃をあきらめていたことには失望した。アンチ・スポーツ精神だ」

#### 近代スポーツの発祥と普及

現在、オリンピックなど、世界的なレベルで行われている競技スポーツの多くは、「近代スポーツ」と呼ばれている。(中略)スポーツが人間の教育、特に青少年の教育に大きな役割を果たすことが認められたことも大きな要因である。(中略)スポーツ、とりわけ団体種目によって、男らしさ、忍耐力、協調性、フェアプレイの精神を養い、紳士(ジェントルマン)を養成した。現在では、ジェントルマンシップ(紳士精神)=スポーツマンシップ(スポーツ精神)が同様な意味合いで用いられている。(後略)

#### スポーツ大会とお金 (一部抜粋)

今ロシアで行われているワールドカップの場合、

- ・ 準備金 約2億円
- ・ 出場 約9億円
- ・ ベスト16 約14億円
- ・ ベスト8 約18億円
- ・ 第4位 約25億円
- ・ 第3位 約28億円
- ・ 準優勝 約32億円
- ・ 優勝 約43億円

がチームに賞金として出るそうだ。この金額はワールドカップ史上最高額です。

表2 振り返り記述の分類結果

分類された要素	記述例	記述人数 (単位：名)
議論を俯瞰的に捉えた意見	どちらも正しい、いろいろな見方はスポーツの面白さの1つ、スポーツを知りたくなった	25
自分と逆の立場の意見への理解	反対派の気持ちはわかる、どちらの意見もわかるので迷う	37
自分と逆の立場の意見を否定	アンチスポーツ精神の意見はおかしい、反対の人の気持ちはわからない	2
反対（スポーツマンシップ）	スポーツマンシップに則っていない、ずるい、勝って決勝Tに進めば気持ちいい	54
反対（観客やマスコミの視点）	見ている人がつまらない、かっこいい試合が見たい、世界から認められるか疑問	31
反対（スポーツは楽しむもの）	スポーツは楽しむため、楽しさのないスポーツはスポーツじゃない	11
反対（作戦失敗の可能性）	セネガルが得点すれば決勝に出られない、他国任せの作戦	14
反対（負けても得られること）	今の力を試すことに意味あり、ここで負けても次がまだある	3
反対（他国に失礼）	相手チームに失礼、セネガルに失礼	7
賛成（ルール、作戦）	ルール内、フェアプレーポイントを利用した、作戦の1つ	42
賛成（決勝T優先）	決勝Tに出るため、結果的に決勝Tに出られた、チャンスがあるならしがみつくなり	49
賛成（選手・監督の立場から見て）	自分が選手だったらやっていた、監督の判断に従っただけ、代表の人たちも悔しかったと思う	23
賛成（勝利至上主義・経済的理由）	現代は勝利が重視されている、パス回しでお金がもたらされた	16
賛成（代表として応援）	日本代表として応援している	1
その他		26

4名のグループでの話し合いを行い、各自の意見を出し合った。この際用いたグループは他教科の議論においても使われている生活班である。グループでの話し合いの後、自身の賛成・反対の立場をホワイトボードに提示した。その意見を元に全体での話し合いを行い、意見の交換を行った。この際、議論開始時点のどのグループにおいても賛成と反対の意見は分かれており、お互いの立場から何らかの意見交換がなされた。最後に、ワークシートに自身の立場と授業を通じた振り返りを記述した。

### 2.3. 分析方法

この授業実践の最後に生徒によって記述された振り返り（A4 1/3程度、7行分）を分析対象とした。この記述を分類し、それらにカテゴリー名を命名した。これらカテゴリーの反応数の分析から、この体育授業における学びを検証した。

### 3. 結果及び考察

振り返り記述の分類の結果、議論自体を俯瞰的に捉えた意見、自分と逆の立場の意見を理解、自分と逆の立場の意見を否定、反対（スポーツマンシップ）、反対（観客やマスコミの視点）、反対（スポーツは楽しむもの）、反対（失敗の可能性）、反対（負けても得られることあり）、反対（他国チームへの配慮）、賛成（ルール、作戦）、賛成（決勝T進出のため）、賛成（選手や監督の立場）、賛成（勝利至上主義や経済的理由）、賛成（日本代表として応援）、その他のカテゴリーに分類された。詳細は表2に示す。

#### 3.1. 結果の集計

生徒は、自身の立場を賛成または反対として表しており、賛成85名、反対45名、どちらにも意思表示しなかった者が6名であった。

また、各カテゴリーの記述人数は表2に示したとおりである。なお、記述人数は1人の記述中に複数の同一カテゴリーの記述があった場合に1人として扱い集

表3 振り返り記述内容のクロス集計結果

	自分と逆の立場 の意見への理解 した意見の記述 あり	議論を俯瞰的に 捉えた記述あり	逆の立場/ 俯瞰双方の 記述あり	逆の立場/ 俯瞰双方の 記述無し	合計
賛成／反対意見の記述 無し	3	5	4	0	14
賛成／反対いずれかの 意見のみを記述	17	8	2	47	74
賛成／反対どちらの意 見も記述	11	6	0	34	49
合計	31	19	6	81	137

計した。この記述人数のうち賛成・反対の部分では、反対（スポーツマンシップ）（50名）や賛成（決勝T優先）（49名）、賛成（ルール、作戦）（42名）、反対（観客やマスコミの視点）（37名）といった意見が多い。このことから各グループにおける議論では、これらの意見を中心に対立軸が作られていたと解釈できる。

さらに、これらの記述について①自身の立場以外の記述が見られるか、または②自身と逆の立場の意見を理解した記述があるか、③議論を俯瞰的に捉えた記述があるかによってクロス集計を行った（表3）。その結果、137名中、①賛成、反対の双方の意見を記述した生徒は49名、②自分と逆の立場の意見を理解する記述をした生徒は37名、③議論を俯瞰的に捉え記述した生徒は25名であった。これらの合計から重複分を除いた値は90名であった。つまり、受講した生徒の約2/3にあたる90名が自身とは逆の立場など様々な立場からこの出来事を捉えていた。この結果は、議論によって多様な意見を取り入れ、多面的に考えをできた生徒の割合と捉えられる。

一方で47名は賛成、反対いずれかの立場からのみの意見を振り返りに記述していた。どのグループでも賛成・反対双方の立場で議論がなされていたが、これら47名は振り返りにおいて、他者の意見を取り入れた多面的な考え方を記述できなかった。

### 3.2 記述内容の検討

ここでは、自身と逆の立場の意見への理解を示す記述や、議論を俯瞰的に捉えた記述について検証する。自身と逆の立場の意見への理解に関する記述は「賛成の意見にも納得した」や「周りの意見を聞いて反対に変化した」、「賛成、反対どちらの気持ちもわかった」と言った記述である。これらの記述には自身の立場とは違う意見を取り入れ、別の見方・考え方を取り入れ

たことが示唆されている。

また、議論を俯瞰的に捉えた記述は「賛否両論だった」、「何かを決める時は周りのことも考える必要がある」、「何を大切にするかによって賛成／反対が違う」、「意見の違いがあって面白かった」、「色々な見方をするのもスポーツの楽しさの1つ」、「他のスポーツも知りたい」といった内容であった。このように議論を俯瞰的に捉えることで、既存の知識や経験とつながる「深い学び」<sup>4)</sup>が生まれていることがうかがえる。例えば、「何かを決める時には周りのことも考える必要がある」という記述は、この議論で賛成、反対双方の意見を聴くことにより、これまでの経験した多様な意見の採り入れのメリットと繋がったことを示すと解釈できる。また「何を大切にするかによって賛成／反対が違う」は賛成／反対の立場になる原因を客観的に、また肯定的に捉えた結果であると捉えることができよう。同様の解釈は「意見の違いがあって面白かった」についても成り立つであろう。また、このように他者の意見を取り入れながら自己の調整を図っていく過程は、人間関係形成・社会形成能力を中心とした汎用的能力<sup>3)</sup>の育成にも繋がると推察できる。

一方で「色々な見方をするのもスポーツの楽しさの1つ」や「他のスポーツも知りたい」といった記述は生涯スポーツにおける「見る」スポーツとしての関わり方を広げるきっかけとなり、スポーツの見方・考え方を深め、生涯スポーツの実践力を育むと解釈できよう。

### 4. まとめ

以上のことを踏まえ、実践した授業における理想的な学習の流れを図1に示した。授業の開始段階では賛成、反対のどちらかの意見のみを有している生徒が多



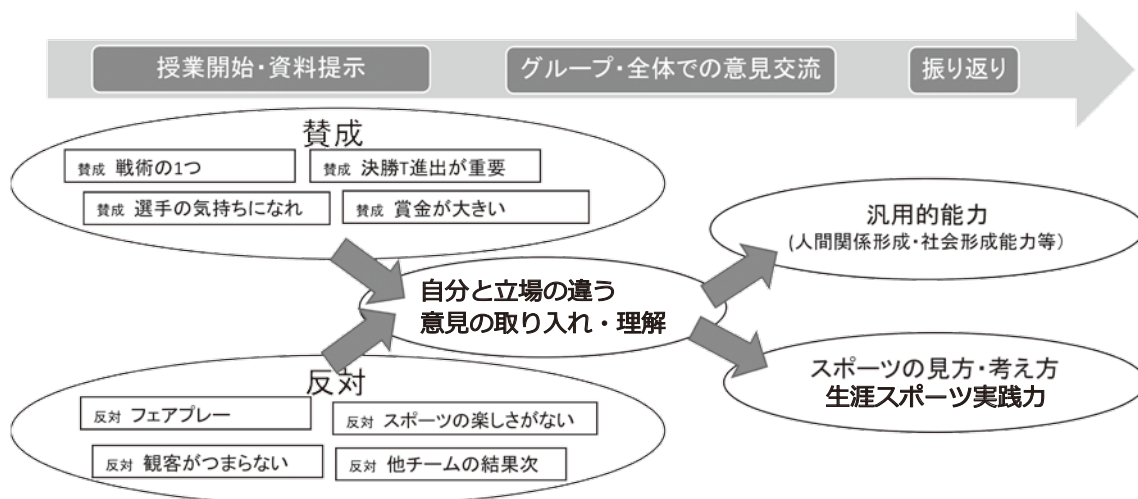


図1 理想的な学習の流れ

い。さらに教師による資料提示によって、それまでの知識と併せて自分なりの意見を形成し、それらをグループや全体で交流した。ここで多くの生徒がそれぞれの意見を理解し、多面的な考え方を持つに至る。さらに、振り返りの段階において俯瞰的に捉えるなかで汎用的能力やスポーツの見方・考え方として捉えられた生徒も認められた。このように振り返り段階において、汎用的能力やスポーツの見方・考え方まで至ることが理想的であろう。振り返り記述では、全員が俯瞰的な捉え方をできず、逆の立場を認める記述や、一方の立場だけからの記述も認められた。しかし、多くの生徒は様々な角度からの意見を聞いたことで、記述には現れなかったものの、このような経路を進んでいたことは想像できる。この俯瞰的な捉え方を促進するには、教師が振り返りにおいて、以前との考え方の変

化や議論の面白さ着目させることで、議論を俯瞰的に捉える生徒を増やせるのではないだろうか。

#### 引用資料

- 1) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領
- 2) 村瀬浩二・流川謙語・三世拓也 (2017) 体育理論の実施状況と実施内容に関する考察. 和歌山大学教育学部紀要 (教育科学) 67, 1-7.
- 3) 国立教育政策研究所 (2011) キャリア発達に関わる諸能力の育成に関する調査研究報告書, [https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/22career\\_shiryou/pdf/career\\_hattatsu\\_all.pdf](https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/22career_shiryou/pdf/career_hattatsu_all.pdf), 最終アクセス日 2018年11月10日
- 4) 田村学 (2017) 「深さ」を実現するためのキーワードは「つながる」授業改善に加えて、「深い学び」を評価する教師力がポイントになる, *Kawaijuku Guideline* 2017.11, 32-34.

